

時間メタファーへの認知的アプローチ

— 日本語の時間表現を中心に —

小野寺 美智子

A Cognitive Approach to Temporal Metaphors:

With Special Reference to Temporal Expressions in Japanese

Michiko ONODERA

要 旨

本論では、空間を指示対象とする言語表現が時間を指示対象として用いられる概念メタファーにおいて Lakoff & Johnson と Moore の分類では説明しきれない事例を取り上げ、Langacker の主体性という観点から分析することの有効性を論じた。特に日本語の時間メタファーである「まえ（前）」と「さき（先）」の用法をもとに Moore の議論を検証した。その結果、主体性の観点から日本語の時間メタファーの特性を説明することの意義が示唆された。

キーワード：時間メタファー，概念メタファー，直示性，主体性

1. はじめに

我々人間は、基本的でありつつ抽象的な概念である「時間」をどのように認知し言語化しているのだろうか。時間のような抽象的な概念を言語表現化する際には、具体的に認知し易い概念を用いて概念化し言語化するという方法が取られると言われている。例えば「世界バドミントン選手権大会の開幕が近づいてきた」の「近づいてきた」は時間の経過をモノの空間的な移動として概念化するものである。そのモノの空間移動は、日常的な身体的経験に基づいて意味拡張し、抽象領域にある「時間」にメタファー的⁽¹⁾に写像（mapping）されると認知言語学的には説明される。しかしながら、すべての時間表現が空間移動からの写像をもとに言語化されるものではなく、「時間があまり残っていない」、「時間を全部使い切った」、「時間を無駄遣いした」など時間を資源、特にお金として概念化される例もある。このように「時間」という概念は複数の種類のメタファーによって形成されているが、本稿では空間表現がどのような体系性をもって

時間表現に転用されているかについて認知言語学の知見を援用し分析する。

抽象的な概念である「時間」については、既に哲学などの分野で論じられているが、言葉を扱う言語学においてメタファーを介して研究されるようになったのは、比較的新しい⁽²⁾。未知の概念を既知の概念を通して理解する方法としてのメタファーは、「時間」のような抽象的ではあるが日常的な概念の形成には不可欠である。本来空間的な意味を表す言語表現が時間を示す言語表現として用いられる現象は、多くの言語に見られると報告されている⁽³⁾。

我々が抽象的な概念である「時間」を言語表現化する際の認知的な働きについては、図地反転 (figure-ground reversal)⁽⁴⁾ のモデルを用いた時間メタファーの分析 (篠原 2007) など多くの研究がなされているが、本稿では、主に Langacker (2008) の「主体性」⁽⁵⁾ という概念を導入して、空間認知と関連付けながら時間メタファー表現の認知構造の特性について考察を行う。

2. 先行研究および問題設定

本節では、まず概念メタファー理論⁽⁶⁾ の概要を提示し、時間メタファーの代表的な先行研究である Lakoff & Johson による時間メタファー理論と Moore による時間メタファー理論について概観し、それぞれ問題点を指摘する。

2.1 Lakoff & Johson (1980, 1999) の概念メタファー (conceptual metaphor)

理論と時間メタファー理論

周知のようにメタファーを単なる言葉の問題としてではなく、認知や思考に関わる問題として分析し、概念メタファー理論を提示したのは、Lakoff & Johson (1980) である。Lakoff & Johson は、従来の修辭的な文飾の技巧としての従来のメタファーとは異なり、メタファーを概念領域間の構造的対応関係として捉え、多くの概念体系はこのメタファーによって構成されており、言語表現としてのメタファーを可能にしていると主張している。この構造的対応関係は、X IS Y という大文字表記の形式で示される。X が目標領域 (喩えられるもの)、Y が起点領域 (喩えるもの) を表し、喩えるものから喩えられるものへ写像される。上述したようにメタファーの本質は、身体経験を通して把握される具体的な概念領域を用いて、抽象的な概念領域を理解するものである。したがって、基本的には起点領域に具体的なものが、目標領域には抽象的なものが選ばれることになる。例えば、ARGUMENT <議論> という概念は、ARGUMENT IS JOURNEY <議論は旅である>、ARGUMENT IS CONTAINER <議論は容器である>、ARGUMENT IS BUILDING <議論は建築物> というように「議論」のどのような側面を

際立たせたいかによって、用いられるメタファーは異なる。

- (1) a. Do you *follow* my argument?
b. *So far*, we've seen that no current theories will work.
c. Your argument doesn't have much *content*.
d. You won't *find* that idea *in* his argument.
e. We've got the *framework* for a *solid* argument.
f. If you don't *support* your argument with solid facts, the whole thing will *collapse*.
g. *At this point* our argument doesn't have *much content*.

(Lakoff & Johson 1980)

上記の (1a) と (1b) は ARGUMENT IS JOURNEY 〈議論は旅である〉メタファー、(1c) と (1d) は ARGUMENT IS CONTAINER 〈議論は容器である〉メタファー、(1e) と (1f) は ARGUMENT IS BUILDING 〈議論は建築物である〉メタファーのそれぞれの例であり、議論の目標や進行状況などに焦点を当てるためには ARGUMENT IS JOURNEY 〈議論は旅である〉メタファーを使い、議論の内容という側面に合わせるには ARGUMENT IS CONTAINER 〈議論は容器である〉メタファーを使うことになる。しかし、議論の「旅」の側面と「容器」の側面を同時に表すことができる (1g) の例のような二種のメタファーが用いられる例もある。

また、LIFE IS JOURNEY 〈人生は旅である〉という概念メタファーを措定することで旅という概念カテゴリーに関わる諸要素、例えば「出発」、「旅立ち」、「分かれ道」といった言葉が体系的に生成され、「新しい音楽人生の出発」、「卒業の日は、新しい人生への旅立ちの時でもある」、「人生の分かれ道」などのように用いられ、「人生」についての記述をより理解し易く表現豊かなものになっている。このように概念間の写像関係として概念メタファーが存在し、その言語的表出としてメタファー表現が産出されると考えられる。Lakoff & Johson は、様々な概念メタファーを挙げているが、次にその中の一つである「時間」についての概念メタファー TIME PASSING IS MOTION 〈時間の経過は空間的移動である〉について述べる。

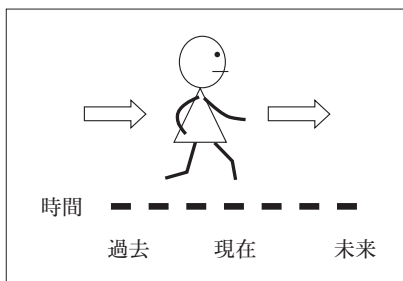
TIME PASSING IS MOTION 〈時間の経過は空間的移動である〉は、空間的移動を起点領域とし、時間経過を目標領域とする概念メタファーである。「時間」について Lakoff & Johson (1999) は、メタファーなしに「時間」を概念化することは実質的に不可能であるとし、我々は多くのメタファーを用いて「時間」の概念化を行なっていると指摘している。(2) のような例で使われているメタファーを時間に関する最も基本的

なメタファーとし、TIME ORIENTATION METAPHOR 〈時間オリエンテーションメタファー〉と呼び、「時間」に方向性が必要であることが述べられている。このメタファーにおいては、「現在」に位置する主体の前方が「未来」であり、「過去」はその主体の後ろにある⁽⁷⁾。

(2) He has a great future *in front of* him.

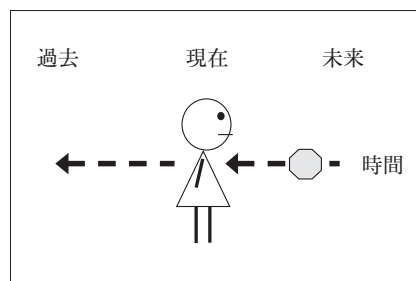
(Lakoff & Johson 1999)

図1 主体移動型メタファー



(篠原 2008: 183)

図2 時間移動型メタファー



(篠原 2008: 184)

さらに Lakoff & Johson は、TIME ORIENTATION METAPHOR 〈時間オリエンテーションメタファー〉に結合する付加的な二つのメタファーとして図1の「主体移動型メタファー」(Moving Experiencer Metaphor)と図2の「時間移動型メタファー」(Moving Time Metaphor)の存在があるとしている。時間的な経過が空間的な移動を通して概念化され、言語化されている現象を何が移動するかによって二つに分類している。「主体移動型メタファー」は時間の経過を主体の空間移動として概念化するものであり、「時間移動型メタファー」は時間の経過をモノの空間移動として概念化するメタファーである。「我々はクリスマスに近づいている」が前者の例で、「クリスマスがやって来る」は後者の例となる。「主体移動型メタファー」では、主体は前方にある未来へ向かって進むことによって時間の経過を経験し、主体が通り過ぎて後方に残してきたモノを過去と捉えるのである。一方、「時間移動型メタファー」では、主体は移動せず、主体の前方にあるモノが主体に向かって近づき、通り過ぎると捉える。前方から近づいてくるモノが未来であり、主体を通り過ぎて後方に過ぎ去れば過去となる。つまり時間を動くモノであり、かつ方向性をもつモノであるという点から説明を試みている。

時間的な概念には、上述したように現在を中心にその前方を未来、後方を過去というような分け方のほかに、「より早い/より前 (Earlier)」と「より遅い/より後 (Later)」という時間的な概念が存在する。「より早い/より前 (Earlier)」と「より遅い/より後

(Later)」は、必ずしも現在を基準に捉えているとは限らず、(3a)のように過去のある時点を基準に述べたり、(3b)のように未来のある時点が参照点として機能する場合もある。これらは、移動性かつ方向性のある時間認知とは異なり、順序概念を介した時間認知であると言える。

- (3) a. 卒業論文を提出した後⁽⁸⁾に口頭試問があった。
b. 研究室に来る前に連絡してください。

Lakoff & Johson の TIME PASSING IS MOTION 〈時間の経過は空間的移动である〉は、概念メタファー理論において多くの言語学者に受け入れられ、分析が行われてきた (Kövecses 2010, 山梨 1995 ほか)。しかしながら Lakoff & Johson の時間メタファー理論では、現在を軸とした過去、未来という時間概念を用い論じられているため (3a) や (3b) のような過去や未来のある時点を参照点にして時間的現象を述べる言語表現については説明ができない。この点について Moore (2014) は、「現在・過去・未来」と「より早い/より前 (Earlier)」・「より遅い/より後 (Later)」という2種類の時間概念を提示し、Lakoff & Johson による時間メタファーの再分類を行なった。次小節では、Moore の時間メタファー理論の概要を述べる。

2.2 Moore (2014) の時間メタファー理論

Lakoff & Johson は TIME PASSING IS MOTION 〈時間の経過は空間的移动である〉について移動するモノを主体と捉えるか時間と捉えるかによって2種類に分類しているのに対して Moore は3種類の分類を提示している。Moving Ego⁽⁹⁾ (「主体移動型」) と Ego-centered Moving Time (「自己中心的時間移動型」) に SEQUENCE IS RELATIVE POSITION ON A PATH を加え再分類し、その結果時間メタファーの目標領域についてより正確な記述が可能になるとしている。さらに現在という時制と関わりがあるかどうか、つまり直示性 (deictic) があるかどうかという点で Moving Ego と Ego-centered Moving Time は、同じグループに属するとし、一方 SEQUENCE IS RELATIVE POSITION ON A PATH は、直示性を必ずしも必要としない別のカテゴリーに分類している。下記の (4a) が Ego-centered Moving Time の例であり、(4b) は SEQUENCE IS RELATIVE POSITION ON A PATH の例となる。

- (4) a. Summer is coming.
b. Fall follows summer.

(Moore 2014: 71)

(4a) と (4b) は、ともにメタフォリカルな方向性の中に移動が含まれている。しかしながら (4a) は come という直示性をもつ移動動詞が用いられている。一方 (4b) は follow という移動動詞が用いられているが、必ずしも直示性を必要とされない順序 (sequencing) が関わっている。日本語では「夏の後に秋がやってくる」となるが、秋は夏の後に来るのは今年に限らず毎年のことであるので直示性はない。さらに主体の視点からも上記の二つの例は、異なる。つまり Ego-centered Moving Time である (4a) は、主体の視点が表現の理解に介在するが、(4b) は主体の視点は、介在せず夏と秋という二つの時間的セグメントの関係によって理解される。また Moving Ego と Ego-centered Moving Time は、“ego-perspective⁽¹⁰⁾ frame of reference” という参照枠が前提になっているが、SEQUENCE IS RELATIVE POSITION ON A PATH は、“field-based frame of reference” が前提となっているとしている。つまり直示性の有無は移動を概念化する際の frame⁽¹¹⁾ of reference (参照枠) の相違に還元できると言える。また Moving Ego と Ego-centered Moving Time では、移動概念は主体と移動されるモノとの相対的關係で構造化されるが、SEQUENCE IS RELATIVE POSITION ON A PATH では、対象となっているモノ同士の関係として時間移動が把握される。

TIME PASSING IS MOTION 〈時間の経過は空間的移動である〉に関して Lakoff & Johson と Moore の先行研究をまとめると表 1 のようになる。

- (5) a. We are *approaching* Christmas.
 b. Christmas is *approaching*.
 c. A reception follows the talks.

(Moore 2014: 5, 73)

表 1 TIME PASSING IS MOTION メタファー

Lakoff & Johson	Moore	例文	直示性
Moving Experiencer (主体移動型)	Moving Ego	(5a)	直示性
Moving Time (時間移動型)	Ego-centered Moving Time	(5b)	直示性
	SEQUENCE IS RELATIVE POSITION ON A PATH	(5c)	非直示

以上 Moore の時間メタファーに関する先行研究を概観した。Lakoff & Johson では議論されていない「より早い/より前 (Earlier)」・「より遅い/より後 (Later)」が Moore では非直示的な SEQUENCE IS RELATIVE POSITION ON A PATH として扱われている。しかしながら「より早い/より前 (Earlier)」・「より遅い/より後

(Later)」の意味を表すメタファーには、発話時を参照点としている直示性のあるものも存在する。この点については後述する。本稿は Moore の分析を否定するものではないが、日本語の時間メタファーの中には Moore の 3 分類では説明できないものがあり、それは Langacker の「主体性」の観点から精査する必要があると主張したい。

次節では、日本語の時間メタファーについてコーパスからの例文を提示しながら特徴を示す。

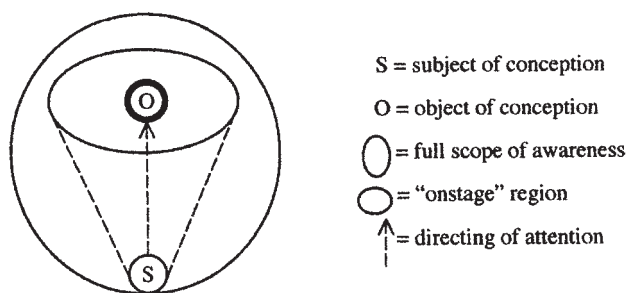
3. 日本語の時間メタファーと主体性

本節では、空間概念を起点領域にもつ日本語の時間メタファーが主体性の観点からどのように捉えられるかについて Langacker による「主体性」を用い、分析を行う。まず主体性について概略を述べ、日本語の時間メタファーの「まえ（前）」と「さき（先）」を取り上げ考察を進める。

3.1 主体性

Langacker の認知文法理論は、概念化者である主体がどのように事態を捉えているかについて分析し、その分析を通して言語現象の全域の説明を試みるというものである。その際、言語表現には直接現れない主体の認知プロセスにも注目している。認知文法の基盤となる認知モデルは、図 3 のように概念化者である主体 S が概念化の対象である客体 O を見る形になっている。主体 S が客体 O をどのように捉えるか (construal) という点がこの認知モデルに与えられる。縦長の楕円は、主体 S が客体 O を見る際の視野に入るすべての領域を表しており、最大スコープ (maximal scope=MS) と呼ぶ。縦長の楕円の中にある横長の楕円は、主体 S が注目している領域である。これを直接スコープ (immediate scope=IS) という。客体 O は、この直接スコープ (IS) 上にあって主体 S が概念化する対象である。この客体 O は、プロフィール (profile) とも

図 3



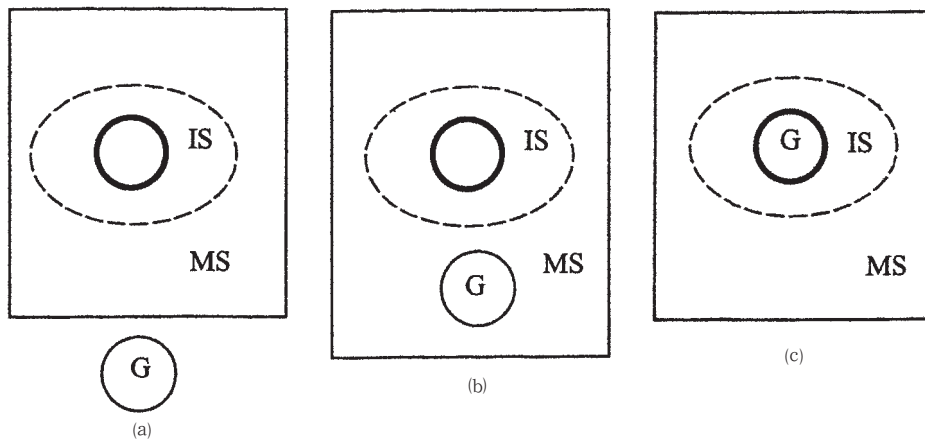
(Langacker 2008: 260)

言われ、太線で示される。Langacker は、あらゆる表現の意味構造の分析をこのような認知モデルを用いて試みている。

Langacker によれば「主体性」とは、概念化者である主体と概念化の対象である客体とが関わる程度のことである。主体はある事態を概念化する際に、同じ場面や事態であっても主体の視点や解釈などにより客体との関わり合いの度合いは異なってくる。上で述べたように図 4 において MS は最大スコープであり、言語化する際に喚起する概念内容全てを含んでいる。IS は、言語化する際に最も直接的に関わっている MS の一部を示している。また、G はグラウンドを表し、概念化者である主体、発話者、発話事態を指す。

図 4 (a)は、発話者を含む G が最大スコープの外側に位置している。つまり (6a) の例のように概念化者である主体は、花子が認知言語学を勉強しているという事態を最大スコープの外側から眺めていることを示している。図 4 (b)と(c)では、概念化者である主体が最大スコープの内部に位置し、それぞれ例文 (6b) と (6c) に対応する。(6b) は、「私は」が言語化されているので、概念化の主体は事態の参加者ではあるが、傍観的に事態を捉えていると言える。一方、(6c) では概念化者である主体は、事態の参加者でもある。つまり主体性の観点から G は客体的に解釈されていると言える。Langacker に従えば、図 4 (c)が一番主体性が高いことになる。

図 4



- (6) a. 花子は認知言語学を勉強している。
 b. 私は認知言語学を勉強している。
 c. 認知言語学を勉強している。

3.2 日本語における時間メタファーの分析：「主体性」の観点から

まず空間概念を表す動詞または名詞からの写像による日本語の時間メタファーについて概説する。例文を Moore の 3 分類に従って分類すれば以下になる。なお、用例は主にコーパスを使用して収集した（下線は筆者による）。

- (6) a. 1980 年代, 1990 年代と現在に近づくほど, さらにタイムラグはなくなっている。
(Moving Ego)
- b. 地上の時間に流される齡は取らないと決めてから……。
(Moving Ego)
- c. 試験日が近づくにつれて言いようもない不安にとられたりして……。
(Ego-centered Moving Time)
- d. むなしく時間が流れるだけである。 (Ego-centered Moving Time)
- e. 商品を購入する前に確認をしてください。
(SEQUENCE IS RELATIVE POSITION ON A PATH)
- f. 新聞より先にその事実を知っている。
(SEQUENCE IS RELATIVE POSITION ON A PATH)

ここでは, Moore の SEQUENCE IS RELATIVE POSITION ON A PATH に分類される「まえ (前)」, 「さき (先)」を使った時間表現について見ていく。「まえ (前)」と「あと (後)」について, 砂川 (2000) は, 時間の経過は「時の流れ」という移動のイメージと結びつき, その流れは過去から未来と向かうと捉えれば, それに直面して対峙するイメージを基に「まえ (前)」が過去となり, 「あと (後)」が未来となるとしている。一方, 過去に背を向けて未来に向かって屹立するというイメージを描けば, 「あと (後)」が過去で「まえ (前)」が未来となるとした上で, メタファーの場合は「食事の前に手を洗いましょう」や「引っ越しの後であらためてお礼にうかがおう」の例に見られるように前者の捉え方が優勢であると説明している。

3.2.1 「まえ (前)」—— 過去・未来・順序

- (7) a. 前にも書いたかもしれませんが……。
b. 前に会ったことがあるよ。
c. 前にも書き込みしましたが成功しか頭に有りません。

(7)に取り上げた例文はいずれも「まえ（前）」は、過去という時間概念を表し、参照点はいずれも発話時となる。「前に」は、発話時より前（過去）という解釈が成り立ち、Moore の Ego-centered Moving Time メタファーに分類されることになる。また発話時が関わっているので直示性があると言える。岩崎（2010）も（7b）のような例文を「順序」ではなく「時間」の意味を表していると述べている。さらに岩崎は「太郎は健より前に学校に着いた」という例文を挙げ、これについては「順序」と分類している。

次に未来の意味をもつ時間表現「まえ（前）」について考察する。

- (8) a. 成長が実感できれば、それを自信として前に進むことができる。
- b. 仕事で壁にぶつかった時に、前に進むヒントを与えてくれる。
- c. 情熱だけでは一歩たりとも前に進むことができない時期があった。

(8)における例文の「まえ（前）」は、いずれも未来を意味している。主体が時間軸を基に過去を後にして前にある未来に向かっていくということになる。(8a)は、参照点が「成長が実感できた時」であり、その後「前に進むことができる」という解釈が可能となる。(8b)においては、「仕事で壁にぶつかった時にヒントが与えられ」その後「前に進む」という内容であるという解釈が成り立つ。(8c)の例文では、言語化はされていないが、過去のある時点から「前に進むことができなかった」ということになる。(8)の例文は、いずれも発話時に関連している表現ではないので非直示的であり、図4(a)のようにグラウンドがオフステージ上に位置し、主体が空間的な身体体験を基に前方にある未来に向かっていくという概念を言語化していると言える。(8)のいずれも「進む」という移動動詞がメタファーとして用いられているが、「まえ（前）」自体には、移動の意味はなく、ある時点を経験点として、その後続く「未来」を指している。したがって Moore の Moving Ego にも Ego-centered Moving Time にも分類できないことになる。岩崎（2010）は、「前途多難」を例に挙げて、「前途」の「前」は主体の前方にある未来を意味しているが、発話時と関連づけることなく解釈が可能なので、非直示的であると述べている。つまり未来を表す「まえ（前）」は、直示性をもつ Moore の Moving Ego と Ego-centered Moving Time とは異なるカテゴリーとなる。

- (9) a. 冬を迎える前に用意しておきましょう。
- b. 発表前に何を話すかを決めたり、練習したりする時間をとるとよい。
- c. 料理教室はいくつもあり、今までも結婚前に娘に通わせる家庭は多いそうだ。

d. 私の来日の前に大統領は離日した。

(9)はいずれも「より早く/より前 (Earlier)」という時間概念をもつ「まえ (前)」の例文である。(9a)では、「用意すること」が「冬を迎えること」より先行しているという関係を言語化している。同様に(9b)では、「発表する」という行為より早い時間に「決めたり、練習したり」という行為が起こるという時間関係を表している。(9c)は、娘が「結婚する」という出来事に先行して「料理教室に通わせる」ということになる。これらの例文は、出来事の間の前後関係または時間上のセグメント同士の間の関係として時間移動が捉えられると言える。図4(a)のようにグラウンドは、オフステージ上にあり、二つの出来事の前後関係を見ていると解釈できる。しかしながら(9a)と(9b)は、文脈によっては、主体性が反映されていると考えられる。(9a)は、「おきましょう」という表現が使われていることから発話者が聞き手を誘っている状況が考えられる。また、(9b)は、発話者が聞き手にアドバイスしているという状況では、時間軸に認知主体がいるという解釈も成り立つ。このことから「順序」を表す時間メタファーの一部は、Mooreの非直示的とするSEQUENCE IS RELATIVE POSITION ON A PATHというカテゴリーに当てはまらないと言える。

篠原(2008)は、MooreのMoving EgoメタファーとEgo-centered Moving Timeメタファーでは、移動概念は主体と移動物との相関関係で構造化されるが、SEQUENCE IS RELATIVE POSITION ON A PATHメタファーでは、時間上の点またはセグメント同士の関係として時間移動が捉えられるため主体から独立していると分析している。しかしながら、上で述べたように日本語の時間メタファーの中には、SEQUENCE IS RELATIVE POSITION ON A PATHメタファーに形式上分類はされるものの文脈を考慮すると主体性が反映される例もあり、その点から完全にMooreの3分類に当てはまらない場合もあることを指摘しておきたい。また、岩崎(2010)は、「直示」を発話時との関連で捉えられることに限って分析しているが、(9d)の例のように「順序」として機能はしているものの発話時が参照点になっていない用例が存在する。「直示性」を発話時との関連に限らず、より広く捉えることでこの例文は、「私」が使用されているので直示性をもつと判断できる。したがってSEQUENCE IS RELATIVE POSITION ON A PATHメタファーに分類はできない。

3.2.2 「さき (先)」—— 過去・未来・順序

「さき (先)」は、「まえ (前)」と同様に前方という空間の概念だけでなく過去を言語化する機能がある。「さき (先)」は、発話時が参照点となり、「まえ (前)」より近い過

去を表している。

- (10) a. 先に分析した抑うつ傾向に関する領域。
- b. 先ほどから言うように……。
- c. 先ごろ出版されて話題を呼んでいる。

(10a)における「先に分析した」という表現からは、数年前という解釈は難しく、過去といっても数ヶ月前あるいは2,3年前の時間の範囲と考えられる。(10b)の「先ほど」となるとより近い過去を表すことになる。また(10c)における「先ごろ」は数日前あるいは数ヶ月前の時間範囲と解釈できる。多少個人差はあるとしても(10)における「先」は、近い過去を示していることは明らかである。過去を表す「さき(先)」は、発話時が参照点になっているので、概念化者である主体が関わっており主体性が反映されていると言える。つまり直示性をもつことになる。MooreのEgo-centered Moving Timeという種類の時間メタファーに該当する。概念化者である主体は時間の流れの中で静止しており、時間が主体に向けて近づき、そして通り過ぎて主体の背後に移動し過去となるというイメージであり、図4(b)のように概念化の主体はオンステージ上にいることになる。

- (11) a. 先行きには不透明な点がある。
- b. 愛していると言っている、先のことまではわからない。
- c. この先もずっと一緒にいたいって思ってるんです。

また、「さき(先)」は、「まえ(前)」と同様に未来という時間概念を言語化する機能も持っている。(11a)の「先行き」とは、これから先のことを意味しており、(11b)と(11c)も発話時を参照点として解釈がされる。つまり概念化の主体が時間軸に位置しており、自分を参照点として未来を言語化していると言える。現在の地点から前・先に向かって歩いて行くという身体的な経験を基に未来を言語化しているのである。未来を意味する「さき(先)」は、過去を表す「さき(先)」と同様にMooreのEgo-centered Moving Timeという種類の時間メタファーに分類される。主体性という観点からは、図4(b)に示されているように概念化者である主体はオンステージ上にいる。

- (12) a. 河田さんは尾崎さんよりも先に亡くなられたが……。
- b. 日本より先に外国で売り出したものだ。
- c. 相手より先に力尽きてしまった。

- d. 旅行に行くのは、センター入試のまだ先だよ。
- e. 退院は当初の予定より先になりそうだ。
- f. 修論提出の先に口頭試問が待っている。

(12)の例文は、2 者間の時間的前後関係を表している。(12a)～(12c)における「さき(先)」は、「より早く/より前 (Earlier)」の意味を持ち、(12d)～(12f)は、「より遅い/より後 (Later)」を示している。岩崎 (2010) は、「さき(先)」は「より」と共起するあるいは比較されるものが明示される以外は発話時が参照点となると指摘している。それは、「より早く/より前 (Earlier)」・「より遅い/より後 (Later)」は、概念化主体の主体性と関わりがなく SEQUENCE IS RELATIVE POSITION ON A PATH メタファーに分類されることを意味する。しかしながら (12c) の例文のように文脈によっては「相手」の比較対象が時間軸に位置する主体である可能性もある。「相手」を「私」に置き換えるとより明確になる。この場合は、直示性をもつことになり、図 4 (a)ではなく図 4 (b)が該当する。このように「さき(先)」の用法には、主体が時間軸に位置し直示性を持つものが存在することから Moore の SEQUENCE IS RELATIVE POSITION ON A PATH では、十分に説明できないことになる。

以上、日本語の時間メタファーである「まえ(前)」と「さき(先)」には、Moore による3分類に該当しないものが存在することを明らかにした。これらの時間メタファーは、Langacker の主体性という観点から分析することでより詳細な説明が可能となるのである。

4. 結 語

本稿では、主に日本語の時間メタファーである「まえ(前)」と「さき(先)」を取り上げ、Moore が提示する時間メタファーの3分類には当てはまらない用法があることを Langacker の主体性という観点から指摘した。Lakoff & Johson による現在・過去・未来を基準にした時間メタファーの2分類を補う形で Moore は Lakoff & Johson の Moving Time を直示性のある Ego-centered Moving Time と非直示的な SEQUENCE IS RELATIVE POSITION ON A PATH に分け、分析しているが、日本語の時間メタファーである「まえ(前)」と「さき(先)」には、順序を意味するにも関わらず直示性の点から SEQUENCE IS RELATIVE POSITION ON A PATH に該当しないと判断できる用法が存在することが分かった。

Langacker の認知モデルにおいてグラウンドがオフステージ上に置かれている場合は、使用される時間メタファーは非直示的であり、Moore の SEQUENCE IS RELATIVE POSITION ON A PATH

TIVE POSITION ON A PATH メタファーに分類される。しかし表面的には非直示的な SEQUENCE IS RELATIVE POSITION ON A PATH の表現形式を持つように見えるが、グラウンドがオンステージ上にあり直示性を持つと考えなければ説明ができない事例が存在する。このような日本語の時間メタファーの用法がどこまで普遍的なものか不明であるが、言語とは身体経験に根ざしたものであるという認知言語学の考えに従えば、空間認知と時間認知にはある種の普遍性があり、他の言語にも同じような言語現象が存在する可能性があることは否めない。

《注》

- (1) ここでのメタファーは、修辭的な文飾の技巧という意味ではなく、ある概念領域 A を別な概念領域 B の使用を通して理解するという認知の営みであり、この認知の営みは、この二つの概念領域間、すなわち起点領域 B から目標領域 A へのメタファー的写像として捉えられる。
- (2) メタファーの認知的研究が活発にされるようになったのは、1970 年代後半からである。それまでは言語学、哲学などの領域ではレトリックの研究として行われていた。言語学では、1980 年代に Lakoff & Johson (1980) による著作が出版され、特に認知言語学の領域において研究が盛んになった。
- (3) Bybee (1994) では、「空間概念と時間概念はそもそも不可分な形で融合しており、そこから空間的な意味を喪失したところに時間表現があるという主張がなされている」(砂川 2000)。
- (4) 言語構造に見られる図地反転は、認知言語学では次のように説明される。
 - (1) ゴールに近づいて来た。
 - (2) ゴールが近づいて来た。
 例文(1)では走者(動いているもの)が「図」として前景化されるが、例文(2)では例文(1)で「地」として背景化されていたゴール(動かないもの)が「図」に選択されている。
- (5) Langacker (2008) で用いられている subjectivity の日本語訳として「主観性」と「主体性」が当てられていることが多いが、本稿では Langacker の著書を和訳した『認知文法論序説』に従い「主体性」を使用することにする。しかし、この日本語の「主体性」にも多義性が見られるが、本稿ではその点については言及しない。また、町田 (2016) が指摘しているように通常「主観」は「客観」との対比で用いられ、「主体」は「客体(対象)」との対比で用いられるので、Langacker の subjectivity の日本語訳としては「主体性」が適当だと考える。
- (6) 瀬戸 (2002) は、Lakoff & Johson の概念メタファー理論について以下のように述べている。Lakoff & Johson の「仮想の敵」は「合理主義に立脚するチョムスキーの生成文法だった」とし、「メタファーの研究の重心を哲学から言語学に移す力があった」と評価している。
- (7) 南米のポリビアとペルーの公用語の一つであるアイマラ語 (Aymara) は、過去を主体の前方に、未来を後方におき言語化する。これは、既に行ったことは自分の前に見えるという体験がもとになっていると考えられている (Moore 2014)。
- (8) 「前」「後」「先」は、空間から時間へ写像された時間メタファーである。

郵便局の前に自転車が止まっている。(空間的な意味)

郵便局に行く前にコンビニに寄る。(時間的な意味)

先生の後について歩く。(空間的な意味)

料金は後で支払う。(時間的な意味)

郵便局の先に駅がある。(空間的な意味)

料金は先に支払う。(時間的な意味)

- (9) 本稿では, Lakoff & Johnson の Moving Experiencer を「主体移動型」, Moving Time を「時間移動型」と表記し, Moore については, 原文のまま Moving Ego, Ego-centered Moving Time, SEQUENCE IS RELATIVE POSITION ON A PATH を用いる。
- (10) Moore (2006) では, “ego-based” という用語を使っていたが, Moore (2014) では “ego-perspective” という表現に変えている。
- (11) frame は, 言語を理解するのに前提として必要となるような背景的な知識集合を指す (Fillmore 2010)。

参考文献

- Bybee, J., R. Perkins and W. Pagliuca 1994 *The Evolution of Grammar: tense, aspect, and modality in the languages of the world*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Deignan, A. 2008 “Corpus Linguistics and Metaphor”. In Gibbs, R. (ed) *The Cambridge Handbook of Metaphor and Thought*, pp. 280–294 Cambridge: Cambridge University Press.
- Evans, Vyvyan and Green, Melanie 2006 *Cognitive Linguistics: An Introduction*. Edinburgh: Edinburgh University Press Ltd.
- Evans, Vyvyan 2009 *How Words Mean: Lexical Concepts, Cognitive Models, and Meaning Construction*. New York: Oxford University Press.
- Fillmore, Charles & Collin Baker 2010 “A Frames Approach to Semantic Analysis”. In Bernd Heine & H. Narrog (eds.) *The Oxford Handbook of Linguistic Analysis*, pp. 313–339 Oxford: Oxford University Press.
- Gentner, D. and Bowdle, B. 2008 “Metaphor as Structure-Mapping”. In Gibbs, R. (ed) *The Cambridge Handbook of Metaphor and Thought*, pp. 109–128 Cambridge: Cambridge University Press.
- 本多啓 2011 「時空間メタファーの経験的基盤をめぐって」『神戸外大論叢』62, pp. 33–56.
- 本多啓 2016 「Subjectification を三項関係から見直す」中村芳久・上原聡編『ラネカーの（間）主観性とその展開』pp. 91–120 開拓社
- 池上嘉彦 2011 「日本語と主観性・主体性」澤田治美編『ひつじ意味論講座 第5巻 主観性と主体性』pp. 49–67 ひつじ書房
- Iwasaki, Shin-ya 2009 “A Cognitive Grammar Account of Time Motion Metaphors: A View from Japanese”, *Cognitive Linguistics* 20(2), pp. 341–366.
- 岩崎真哉 2010 「メタファーとメトニミーの認知的分析：時間表現を中心に」『大阪工業大学紀要 人文社会編』9月 第55巻第1号 pp. 1–22
- Kovecses, Zoltan 2010 *Metaphor: A Practical Introduction Second Edition*. Oxford: Oxford University Press.
- Lakoff, George and Mark Johnson 1980 *Metaphors We Live By*. Chicago: The University of Chicago Press. (渡部昇一・楠瀬淳三・下谷和幸(訳) 1986 『レトリックと人生』大修館書店)
- Lakoff, George and Mark Johnson 1999 *Philosophy in the Flesh: The Embodied Mind and its*

- Challenge to Western Thought*. New York: Basic Books. (計見一雄 (訳) 2004 『肉中の哲学：肉体を有したマインドが西洋の思考に挑戦する』 哲学書房)
- Langacker, Ronald W. 1990 *Concept, Image, and Symbol: the Cognitive Basis of Grammar*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. 2006 "Subjectification, Grammaticization, and Conceptual Archetypes." In Athanasizdou, Angeliki, Costas Canakis, and Bert Cornillie (eds.), *Subjectification: Various Paths to Subjectivity*. Berlin: Mouton de Gruyter. 17-40
- Langacker, Ronald W. 2008 *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford: Oxford University Press. (山梨正明 (監訳) 2011 『認知文法論序説』 研究社)
- 町田章 2016 「傍観者と参与者 — 認知主体の二つのあり方 —」 中村芳久・上原聡編『ラネカーの (間) 主観性とその展開』 開拓社
- Moore, Kevin E. 2006 "Space-to-Time Mappings and Temporal Concepts". *Cognitive Linguistics* 17, pp. 199-244.
- Moore, Kevin E. 2014 *The Spatial Language of Time: Metaphor, metonymy, and frames of reference*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- 中村芳久 2016 「Langacker の視点構図と (間) 主観性 — 認知文法の記述とその拡張 —」 中村芳久・上原聡編『ラネカーの (間) 主観性とその展開』 pp. 1-51 開拓社
- 小野寺美智子 2011 「概念メタファー理論に関する一考察 — メタファーの認知的基盤と動機 —」 『拓殖大学語学研究第 124 号』 pp. 1-23.
- 瀬戸賢一 1995 『メタファー思考』 講談社
- 瀬戸賢一 2002 「メタファー研究の系譜」 月刊『言語』 第 31 巻 第 8 号
- 瀬戸賢一 2017 『時間の言語学 — メタファーから読みとく』 筑摩書房
- 篠原和子 2007 「時間のメタファーにおける図と地の問題」 楠見孝編『メタファー研究の最前線』 pp. 201-216 ひつじ書房
- 篠原和子 2008 「時間メタファーにおける『さき』の用法と直示的時間解釈」 篠原和子・片岡邦好編『ことば・空間・身体』 pp. 179-211 ひつじ書房
- 砂川有里子 2000 「空間から時間へのメタファー — 日本語の動詞と名詞の文法化 —」 青木三郎編『空間表現と文法』 pp. 105-142 くろしお出版
- 谷口一美 2003 『英語学モノグラフシリーズ 20 認知意味論の新展開 メタファーとメトニミー』 研究社
- 碓井智子 2009 「時間認知モデル — 7 つの普遍的特性と 6 つの時間認知モデル」 山梨正明他編『認知言語学論考』 No. 8 pp. 1-80 ひつじ書房
- 碓井智子 2013 「時間の上位概念と時間の特性」 児玉一宏・小山哲春編『言語の創発と身体性 山梨正明教授退官記念論文集』 pp. 387-399 ひつじ書房
- 山梨正明 1995 『認知文法論』 ひつじ書房

資料 (コーパスからの引用)

NINJAL-LWP for BCCWJ <http://nlb.ninjal.ac.jp>

少納言 BCCWJ http://www.kotonoha.gr.jp/shonagon/search_form

【付記】

本稿は拓殖大学人文科学研究所の 2016 年度個人研究助成に基づく研究成果の一部をまとめたものである。